

北 庄 原 爆 記 録

第101号 2024年8月1日（毎月1日発行）

郷土の本棚⑬（文責・赤川仁洋）

「庄原・原爆の記録第1集」

社会科同好会

昭和47年の出版である。ガリ版刷りだろうか。手書きの文字をわら半紙に印刷、B5判47ページの冊子。発行は社会科同好会、当時の庄原市内の小学校教諭で組織された会で、14人のメンバーが参加している。

護にあたった人たちは、それぞれ被爆者の名簿を作っていたが、軍の機密に触れると言われて軍人に破棄されたという。

このままでは、戦争の悲惨な出来事が、記録からも記憶からも消えてしまう。危機感を覚えた同好会のメンバーは、一年間をかけて資料収集や多くの関係者の人に面接、聞き取りを行った。この冊子には、二度と戦争を起こしてはならないとの強い願いが込められている。

だった。庄原日赤に広島第一陸軍病院分院を設定して、軽症患者の一部を転院させたいから承諾してほしい。言葉は丁寧だが、強制命令に等しい。かくして、陸軍病院分院の準備が行われ、7月の中旬には30名の患者が転院している。8月6日にも70名が転院、午前中に収容されている。出発が遅れていた、転院の予定が後日であれば、その70名も被爆していたわけで、思わず運命という言葉を思い浮かべてしまう。

翌7日から、被爆軍人が軍用列車で庄原日赤にどんどん運ばれて来ることになる。その数約300人、病室が足りるはずもなく、隣接の庄原国民学校（現・庄原小学校）の校舎に収容した。

看護するスタッフも足りず、愛国婦人会と一般婦人有志に援助を要請、わたし（赤川）の母親も看護に協力した一人である。

「板間へ『むしろ』や毛布を敷いて（ふり）を並べたようにねかせた。蚊帳が無いので蚊と蠅に困った。眼、耳、鼻から血膿が出る、蠅の蛆が出る、人いきで蒸されるのと膿汁の悪臭に堪えられない。」

「婦人会の差当っての仕事は、団扇（うちわ）で蠅と蚊を追い拂うことと両便の世話であった。」

こうした話は、わたしも母親から聞いている。蛆がわいた傷口が

痒いと訴えられるのだが、団扇であおいであげることしかできなかったと言っていた。

9日頃になると、下痢患者が続出。赤痢の疑いで大恐慌を来したが、検査の結果は陰性だった。この下痢は放射能による障害だったが、当時は原子爆弾の知識も放射能への対処法も皆無だった。収容して4～5日目から死者が続出。

「火葬するには町営の火葬場は規模が小さく間に合はない。そこで、私の少年時代に火葬場が在ったところのある、上野池の上手、俗称論所（ろんじょ）に共同墓地の原野があることを思い出し、其の原野で野天火葬することに決し、特別人夫を備うた。」

これは母親の話と違って、遺体を校庭のグラウンドで野焼きして、黒い煙が絶えず立ち昇っていた……、母親の記憶間違いか、わたしが頭の中で無意識に脚色してしまっただろうか。

棺を手配したが間に合わず、死体を毛布で包んで大八車で運んだという。地方事務所へ特別交渉して板の配給を受け、三分分の棺を作成。運搬途中だけ使用して、何度も使用。夏の暑さで死体の傷みもひどく、終り頃には棺の中はどろ



社会科同好会発行の“原爆の証言”をまとめた冊子類（当時のメンバーだった上田輝馬氏所蔵）

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン:ROUTE183
協賛：九日市愛好会